



砂浜の端にそびえたつ〈それ〉は、思っていたよりも異物という感じがしなかった。

丈は、防砂林の二倍ぐらい。幅は二分の一ぐらい。根元はどっしりとしていて、海に面する側に苔が生えていた。先端は空に向かってなだらかなアーチを描いて細り、やがて夏の日差しに消えた。

手のひらで触れてみると、内側からじわっと熱い。が、触れ続けられないほどではない。

ざらつく表面をなぞりながら、ゆっくり一周回ってみる。

ところどころ傷や落書き、タバコか花火でつけられた焦げ跡があった。

ぐるりと回って、元の位置に戻る。

靴をおろし、両腕で幹を抱きしめてみる。と、そこで指先が触れあった。

「おそいよ、マチさん」

やっぱり、いた。

スミちゃんは私と同じポーズでそこにいた。

〈N市海水浴場の砂浜に、巨大な角が出現した〉

そのニュースを耳にして、私はすぐにスミちゃんの事を思い出した。

そこに行けば会える。確信はあったが、私はあえて時季を待った。記者や野次馬が大勢いる中で彼女に会えるはずがないと考えたのだ。

そして、思っていたほど待つ必要はなかった。いまや誰もアザラシのタマちゃんの行方に思いを馳せることがないように、季節が三つ過ぎる前に人々はツノから興味を失った。日常の風景と化したツノは、いまや地元サーフィン大会の大会名に加えられたり、小中学校の美術の課題になったりした。

「どれだけ待たせるのさ、まったく」

「……ごめんごめん」

「待ちくたびれたぜ」

彼女は腕組みして眉間に皺を寄せ、白い歯をみせた。灰色の作業服にスニーカー、薄手の白手袋。同じものを私もつい先週まで身につけ、働いていた。

スミちゃんは、私の唯一の友達だった。

厳密にはパート仲間。駅から専用のワゴン車で一時間半、鶏舎と田んぼの並びにいきなりあらわれる工場で、同じ「流れてくる試験管に次々とシールを貼る」仕事をしていた。時給1000円。休憩45分の10時間労働。時間内に終わらないと班単位でサービス残業になる上、間違えると誰が間違えたか即座にわかるシステムだった。プレッシャーは重くのしかかるが単純作業ゆえに、監視役の社員からは「こんな簡単な事もできないの」と見下される、そんな仕事だった。

スミちゃんは二十歳で、私のちょうど半分の年齢だった。

休憩のタイミングが一緒で、よく話すようになった。気さくで明るい子だった。年が離れていることなど意に介さず、同級生と話すような調子でくだらないことを延々話した。話が盛り上がり過ぎて、仕事後に駅前のマックに寄って話し続けたことも一度や二度ではない。

「スミちゃん。これって、スミちゃんがやったの？」

私たちはツノがつくる巨大な日陰に座った。ひんやりとした砂が気持ちいい。

「そうだよ」

スミちゃんは汗一つかいていない。

「……………なんか、すごいね」

尋ねたくせに、そして予想通りの答えだったのに、私はそのことについて何と書いていいかわからなかった。

「まるで何か、この下に怪獣が埋まってるみたいでしょ」

「埋まってないの？」

「このままぐんぐん、宇宙まで伸びていきそうでしょ」

「伸びていかないの？」

スミちゃんは含み笑いを浮かべ、それからツノに向かって張り手を始めた。

相撲の稽古でみる、「テッポウ」だった。

真夏の日差しの下、私たちは揃ってテッポウした。

「あたし、ツノがあるの」

それを聞いたのは、工場の休憩室だった。マチさんにだけ言うね、という前置きのあとで彼女が私に耳打ちしたのだ。

スミちゃんは後ろを向いて髪をたくし上げ、右耳から上三センチくらいのところを見せてくれた。そこには確かに乳白色の突起物があった。触れてもいいよと言われたのでおそろおそろ指先でさぐってみると、そこだけへんにつめたく、てざわりは陶器のように滑らかだった。

「……それ、いつから？」

スミちゃんはあからさまに声をひそめ、水筒のお茶をぐいっと飲んだ。休憩室の戸棚上には緑茶粉末が常備してあるが、それは社員のためのもので私たちパートが飲むのは禁じられていた。別に飲みたくもなかったが。

「これ、生まれつきなの。なんか骨が出っ張ってるんだって。普段は髪で隠れてるけど。で、初めはもっとざらざらしてたんだけど、触ってるうちにツルツルになったの」

「尾てい骨、みたいな……？」

私は自分の持っている知識をどうにか絞り出した。背骨の先にある尾てい骨は確か、尻尾の退化したものだったはずだ。出生時に成長が止まり、消えてしまうそれが、稀に残り続ける人もいるという。

「やっぱり、そう思う？」

スミちゃんは平常時でも輝いている両目を余計にきらきらさせていた。

「だとしたら、あたしって元々は鬼ってことだよな？」

「え？」

「元々猿だった名残ってわけでしょ。尾てい骨って。だったら、あたし元々鬼だったってことじゃん」

「そう……かなあ？」

「そうだよ。あたしね、もっと鬼化しようと思って」

おにか、という言葉があまりに聞き慣れなくて「鬼化」と気づくまで時間がかかった。

スミちゃんはすっと立ち上がった。空になった水筒のコップに緑茶粉末を残らずぶちこみ、粉塵の舞う中にポットのお湯を直線でそそぐ。

「あたし、ヒトの人生に未練なんかもう全然ないんだ」

その緑の泥を、彼女は立ったまま飲みほした。

「マチさんって、泳げる人？」

テッポウを終え、スミちゃんは顔全体にまとわりつく黒髪をつまんで払った。二人とも汗だくだった。

「泳げるよ」

「マチさん、なんとなく背泳ぎ得意そう」

「別に得意じゃないよ。クロールとか、の方が速いかな」

「木登りは？」

「無理。高いところ、無理だから」

「えー、得意そう、なんとなく。絶対得意だと思う」

「何で？」

「何でだろ……えーとね、あ、わかった。コアラっぽいんだ」

「スミちゃん」

「悪い意味じゃないよ？ 顔っていうか、雰囲気。マスコットのかわいさっていうか、あー、笹とか似合いそう。じゃないか、それじゃパンダか」

「ユーカリだよ。じゃなくてさ、スミちゃん」

「何、ユーカリって。あ、知ってる？ コアラって一日20時間寝るんだって。やべーよね。まじニートだよ」

「スミちゃん！」

スミちゃんは全部分かり切ったような顔で、こちらを見ていた。

「私の話、聞いてくれるかな」

「……あ、話？ えー、聞くよ？ でも、その前にコアラ見てもいい？ 一瞬だけ。それ見たら

聞くから」

仕方なく私はケータイを取り出し、YouTubeで検索してコアラの動画を見せた。ユーカリの葉っぱをわしわし食べる野生のコアラ。眠るコアラ。イメージ通りに子コアラを背負う母コアラ。動画を見せたら本当にスミちゃんは落ち着いた。

「あたしさあ」

だが驚くことに、話したのはスミちゃんだった。不平ははっきりと表情で示したが、彼女は気にもとめずに続ける。思い返してみれば、いつもそうだった。

「中学校のときね、自由学習っていう授業があって。そこにベネッセの人が講演しにきたの。あの会社のベネッセね。その人が正社員と非正規雇用者の生涯年収にどれだけ差があるのかっていう話をしてて、まあ、要するに〈フリーターになったら人生詰むよ〉って話をしたの。その時は流して聞いてただけど、実際フリーターになった瞬間にふっと思い出したんだ。その時の光景っていうか、教室の空気とか、棒グラフとか、ベネッセの人の顔とかネクタイの柄とか、全部。あ、あたし人生詰んだんだって思って。わーって」

「ねえ、スミちゃん。このツノって、なんなの？ 何で伸びてきたの？ これからどうなるの？」

「マチさんがわからないのに、あたしにわかるわけないじゃん。マチさん、あたしの倍以上生きてるのに」

「……私が、思うにね」

「だめ！」

スミちゃんは血相を変えて叫んだ。

でも私はやめなかった。やめる気はさらさらなかった。続けるのが自分の役割だと思っていたからだ。

「私が思うに」

「やめてってば！ 口にしないで！ やめて！ お願い！」

両の目が警戒心をむきだしにした猫の目になる。そしてまた何度も、繰り返し叫んだ。その声には非難の色よりも、私との繋がりを失いたくないという切実さが感じられた。

「思うに、このツノって」

「やめろ！」

どろどろに溶けきった蠟を喉に流し込んで、うがいするように叫ぶ。

その口はそのままぱっくりと開き切り、奥歯まで丸見えになった。いきおい運ばれてきた舌先が空の方角を指し示すように伸びたかと思えば、そのまま表面だけがつるんとめくれあがって、とうとう顔全体が裏返ってしまう。ヤシの葉のようにぷらんと垂れ下がる頭髪。その先がどんどん地面に近くに従って、体が割れてゆく。こまかい肉の繊維がぶちぶち切れて、血が思いもしないところからあふれた。

「このツノ、スミちゃんの生まれ変わりなんじゃないの」

今日これから、私は証言台に立つ。

スミちゃんが倒れた時、そばに居るほとんどの人が見て見ぬフリをしたこと。救急車を呼ぼうとしたら、作業リーダーの社員が「それは無理」「派遣会社とまず相談しないと」と言ったこと。会社の車を使って運べ、ただ外回りに使用中で二時間後に戻ってくるから、それから運びたい奴は運べと言ひ、休憩に入ったこと。記憶に焼きついているすべての出来事を白日の下にさらす。すべては決して生まれ変わらないスミちゃんのためだった。

証言だけじゃない。私はこれから徹底的に会社を潰しにかかるつもりだ。不当解雇、労災隠し、偽装請負。叩けばいくらでも埃が出る、というのはまさにこういう場合に使うのだろう。労働者ユニオンの協力を得て、生まれてはじめての喧嘩に挑む。

「もっと鬼化しようと思って」「ヒトの人生に未練なんかないんだ」

あの時スミちゃんは、こう続けたのだ。

「少なくとも私が鬼だってこと、見せつけてやらなくちゃ」

覚悟は決まっていた。私の最大の強みは、日々ぎりぎりの生活をしているだけに、すぐにでも死ぬ気になれるということだ。

太陽が雲に隠れ、昼間の暢気な風がぴたりと止まる。

足裏におおきな揺れを感じた。足指の間の砂がざわめきだす。

揺れの中で、否、揺れに乗じてか、地表から無数のツノが生えてきた。

形はさまざまで、いずれも乳歯のような若いツノだ。よく見ればうっすら透けている。ほとんど音はなく、やかましいのは頭上のウミネコばかりだった。

いつの間にかスミちゃんはいない。

私はケータイで時間を確かめ、砂浜を後にした。

振り向きはしなかったが、ツノの群れが育っていく気配を背中に感じた。繁殖、という言葉が頭に浮かぶ。

開廷の時間が迫っていた。

巻き起こる砂埃に目をこすったら、かえってあたらしい涙があふれた。